

国際都市マニラと日本 —近世から現代まで—

Manila the international city and Japan
—From the early modern to modern period—

渡邊 顕彦¹, 松村 茂樹², 李 美淑², 川村 寛文², 渡辺 美波³,
利根川 千枝子⁴, フ セイ³, ガ ビ³, ソン ロセイ³
Akihiko Watanabe¹, Shigeki Matsumura², Misook Lee², Satofumi Kawamura², Minami Watanabe³,
Chieko Tonegawa⁴, Jing Fu³, Wei He³, and Lujing Sun³

¹比較文化学部比較文化学科, ²文学部コミュニケーション文化学科,
³言語文化学専攻修士課程国際文化専修, ⁴言語文化学専攻博士後期課程国際文化専修

キーワード: フィリピン, マニラ, 日本, 近世, 現代
Key words: The Philippines, Manila, Japan, Early Modernity, Modernity

1. 研究目的

フィリピン, 日本は共にアジア大陸東端に位置する島国であり, 地理的条件や人口規模も似通っている。しかし 16 世紀半ばに, ほぼ同時に西洋勢力に接した後, 両国が対外関係で辿った道は実に対照的である。フィリピンは数百年間スペインそしてアメリカに統治されアジア随一の国際色豊かな国となったのに対し, 日本はいわゆる鎖国を経て現在も閉鎖的・国粹的と評されることが多い。他方フィリピンは経済的には第 3 世界, 日本は発展した先進国と一般的にはみなされる。もしも国際化あるいは西洋化イコール近代化であるならば, 日本とフィリピンの状況は実に奇妙な, 矛盾したものであるというか, 実のところどちらのほうが近代化しているのか判断するのが難しい。

本研究はフィリピンの中でもスペインやアメリカ統治時代の支配拠点であり現在も首都であるマニラに注目し, 特にその日本と西洋および中華世界を繋げる結節点としての特徴を探ることを目的とした。具体的にはキリシタン, 日中関係, メディアを研究対象とする学内研究者が協力し, 16 世紀から現代に至るまで, マニラを中心に日本, フィリピン, そして西洋・東洋文化の間でどのような出会いがあったのかを明らかにすることを試みた。また学外研究者等との関係も構築し今後の外部資金獲得・プロジェクト立ち上げにつなげることを

副次的な目的とした。

2. 研究実施内容

2024 年度前期は現地調査の準備にあてた。大学院の授業では本研究メンバーである渡辺, 利根川, ソンロセイと代表者がフィリピンに関する 2 次資料を調査した。具体的に渡辺は近現代フィリピンにおける映画, 利根川は近世フィリピンにおける日系人および華人の活動, ソンロセイは近現代フィリピンにおける『ボルテス V』など日本の文化的産物の受容について調査しその成果を授業内で報告した。利根川の研究は本研究メンバーである松村, ソンロセイの研究は同メンバーの川村が統括しアドバイスした。夏季休業中, 渡辺はマニラに短期間滞在し現地の映画文化調査を調査した。

2024 年度後期も代表者の大学院授業で渡辺, フセイ, および新たに研究メンバーとして加わったガビがフィリピンの調査研究を続行した。フセイは授業内で現代中国とフィリピンを比較, また両国関係について考察し, ガビはフィリピンにおける LGBTQ 運動と国民の 8~9 割が信者であるカトリック教会との関係について 2 次文献を精査要約した。フセイの研究調査は本研究メンバーである松村, ガビの研究は同メンバーである李が統括しアドバイスした。

2024 年 2 月には 3 泊 4 日の日程でフィリピンへ

の調査旅行を実施した。参加者は共同研究プロジェクトメンバーのうち代表者、渡辺、利根川、ガビ、であった。ほか外部からは児嶋由枝（早稲田大学）、澤村り子（同）、阿久根晋（日本学術振興会特別研究員 PD）、藤川真由（明治大学）、川上直哉（仙台白百合女子大学）、支倉正隆（支倉常長家当主）が参加した。日比関係に関心がある外部研究者やほか関係者に加わっていただいたことは幸いであるが、他方多くの学内共同研究メンバーが学務等所用により参加できなかったことは残念である。

フィリピン到着は夕刻であったが早速大渋滞に巻き込まれ、日本とは異なる現地の交通事情について学ぶ機会となった。翌日は近世を中心とした日比交流に関係する史跡等を厳選して訪れた。午前中は城壁に囲まれたスペイン統治時代のマニラであるイントラムロスと称される地区に向かった。まず Museo de Intramuros で 16～19 世紀のマニラやフィリピンに数多く残るカトリック教会芸術について学び、それからフィリピンで現存するおそらく最古の教会である San Agustin Church（1606 年建立）と隣接するアウグスチノ会修道院博物館を訪れた。これらの建物は第 2 次世界大戦末期、イントラムロスが破壊された際、城壁以外に奇跡的に無傷で残されたほぼ唯一のものである。ほか数多くあったスペイン統治時代の史跡はこの戦闘で完全に廃墟となり、一部その後再建されたものの多くは戦後流入した貧民の住居になったりあるいは新たに建設された大学等施設になったりした。中には、戦後 80 年経った今でも廃墟のままのものもある。

San Agustin Church と修道院および博物館では、児嶋氏の知己であるキュレーター Louella Revilla に案内していただき、通常の見学者には閉ざされている内陣やクワイヤも見せていただいた。なおこの博物館の主要な展示物の一つである 17 世紀初頭作成「ロザリオの聖母」画は、児嶋氏が近世日本のイエズス会セミナリオ画学校の画風を伝えることを指摘されており、その旨が児嶋氏の名前入りで博物館の展示説明にも記されている。17 世紀の日比交流を証する、大変貴重な美術作品である。

午後はイントラムロスを離れ、1611 年創立の Santo Tomas 大学に向かった。Santo Tomas 大学はアジア太平洋地域における西洋で認可された最古の大学であり、ここや 1620 年にこの予備校とし

て設立された Letran 大学では近世に日系人も学んでいたことが確認されている。この歴史ある大学を訪れ、まずは同大学博物館にて古代から現代までの様々な芸術作品や遺物を見学した。その後、同大学付属図書館にて図書館員 Symon Lagao 氏のご案内により 15 世紀から 19 世紀までの印刷本コレクションやその修復およびデジタル化について、実際の作業をしている場に赴き説明していただいた。Lagao 氏は同付属図書館の Heritage Library の統括をされているが、同部署はマニラの第 3 代司教であり同大学の創立者でもある Miguel de Benavides（1552-1605）の蔵書を現在に伝える、大変由緒ある重要なものである。

この日の締めくくりとして夕刻、大学と同じ Quezon City 地区にある San Francisco del Monte 修道院を訪れた。この修道院は 16 世紀、長崎で殉教したいわゆる日本 26 聖人の筆頭 Pedro Bautista（1542-1597）が 1590 年に建立したと伝わる。施設内には彼が日本渡航前に黙想修行したと伝えられる洞窟も残されている。ここではフランシスコ会の修道士でありアーキビストの Bien Petrarca 氏に案内解説していただいたが、施設内の建物は一見近現代風に見えるものの、教会堂側壁の一部や修道院本体は 17 世紀にさかのぼることであった。また修道院中庭には Bautista が掘り当てたと伝えられる泉がある。施設内の博物館は大変残念ながら修復中とのことであり見学できなかったが、近世の遺物も所蔵しているとのことであった。また施設内には Bautista の日本における 26 聖人の逮捕尋問や殉教の様を描いたジオラマもあり日本とのつながりが今でも継承・発信されていることが確認できた。同修道院文書館にかつてあった近世の古文書は数十年前にスペインに移送され現在はないとのことであったが、フィリピンや日本におけるフランシスコ会の活動に関する研究図書は一定程度そろっており、キリシタン史を専門とする外部参加者たちも大いなる関心をもってこれらを閲覧したり写真を撮ったりしていた。この修道院は外部参加者の澤村氏（ただし彼女もこれまで訪問したことはなかったとのこと）より代表者が知らされ、今回訪問をアレンジしたものだが、予想外の発見の連続に皆時間を過ぎるのを忘れて興奮していた。

フィリピンでもイントラムロス等、ある程度史跡として知られている観光名所があり、また「フィリピンのバロック様式教会群」はユネスコの世

界遺産として 1993 年に認定されているが、他方この修道院のようにあまり広く知られていない、また個人では行きづらい歴史研究の対象となりうる遺産もまだ多くあるのではとも言われている。フィリピンの近世史は実証的な調査研究の余地が大いにあると世界各地の研究仲間も代表者に語っている。また 16～17 世紀フィリピンは日本人キリシタンも多く渡来し華人やヨーロッパ系移民とも交流していたことが文献史料、古美術、考古学的調査などにより確認されている。この日の調査はごく短い限定的なものではあったが、将来的な発展の可能性を感じさせたということは参加者全員の一致した結論であった。

次の日の午前中は研究調査参加者全員が宿泊ホテル近くの会議室に集まり、近世フィリピンのスペイン語文献について研究しておられる Jorge Mojarro 氏 (Santo Tomas 大学) にも来ていただいてシンポジウムを開催した。まず代表者が今回の研究の趣旨説明や参加者の短い紹介を行い、次に Mojarro 氏が日本カトリック宣教拠点として、またその宣教を宣伝するための多くの文献が作成された地でもあるマニラについて研究成果を報告した。次に児嶋氏が San Agustin 修道院博物館で自身が発見された日本伝来の可能性がある (あるいは日本で教授された画法で描かれたと思われる) 《ロザリオの聖母》画とそれを模した近世以降のフィリピンの諸作品について、藤川氏が 16～17 世紀マニラで作成されたと推定されるいわゆる Boxer codex 内にある日本人を描いた絵について報告した。澤村氏は近世マニラ周辺にあったとされる複数の日本人街が現在どこにあたるのか、阿久根氏はキリシタン時代末期に Antonio Rubino (1578-1643) が組織した 2 隊のイエズス会宣教団を取り上げ、各隊のマニラ出航の背景や日本到達後の結末について古記録に基づく実証的な考察を披露した。さらに支倉氏からは直系の先祖にあたる支倉常長が率いた使節団の足跡 (ちなみに常長はフィリピンに 2 年間、おそらく今回訪れた San Francisco del Monte 修道院を中心に滞在している)、スペインの Coria del Río 市を中心に企画されている支倉都市同盟について、また川上氏からは同使節団を企画し最後は日本で殉教した Luis Sotelo (1574-1624) (彼もフィリピンでは長く San Francisco del Monte 修道院を拠点とし活動した) の再評価についてご教示いただいた。最後に利根川が内藤如安 (1550-1626)、内藤ジュリア (1566-1627) など禁教令によってフ

ィリピンに追放された日本人キリシタンの事績について、ガビがフィリピンにおける LGBTQ 運動と同地において存在感が非常に強い既存宗教 (キリスト教が人口比で 9 割近いが南部ではスペイン統治時代より前に伝来したイスラム教も根強い) との複雑な関係について、渡辺がフィリピンで伝統的に「第 3 の性」として認知されてきたいわゆるバクラ、特に彼らの映画界における最近の活躍について調査結果をまとめて報告した。内容が近世から現代にわたる、フィリピンや日本文化そして日比関係史の様々な諸相に目配りした中身豊かなシンポジウムとなった。

同日午後は 3 つのグループにわかれ、一部参加者は澤村氏が主導し近世の日本人街があったと推定されるマニラ市内の数か所や主要な歴史博物館を巡り、別の参加者たちはショッピングセンターが並ぶマカティに赴き、代表者は宿泊地に近い Enderun College を訪問見学した。Enderun College は日本人留学生を短期長期で多く受け入れ英語教育のほかビジネス系の授業や現地企業におけるインターシップの機会を提供しており、教育における日比交流に貢献している様子が学べた。

3. まとめと今後の課題

2 で述べた諸活動により、本研究の目的は十分に達成できたと考える。研究メンバーは近世から現代までの日比関係について既存研究の認識を深め、特に国際都市マニラにおいてこれまでどのような日中欧の文化伝統の出会いがあったのかを明らかにした。

本研究の副次的な目的としていた外部資金獲得・プロジェクト立ち上げだが、本研究の一環として行ったフィリピン研究調査に参加された複数の方々も共同研究者として申請した科学研究費課題は残念ながら不採択であったことが帰国時に判明した。しかし本研究を通して現地調査やその準備段階で得られた知見や学内学外研究者の間で培われた関係は今後の外部研究資金獲得のための堅固な土台となるだろう。代表者としては特に次の外部資金採択に向けては研究課題の中心として近世の国際都市マニラをよりはっきりと位置づけ、また同地に中世から渡来し共同体を形成してきた華人にもより注目したいと考え、そのための準備を開始している。2025 年度に向けてはこの方向で学内の研究資金を新たに申請し、年度中に新たな外部資金申請をする心づもりである。

4. この助成による発表論文等

①学会発表

[1] シンポジウム「国際都市マニラと日本—近世から現代まで—」2025年2月27日(木)9:00-12:00,
「BGC One Park Drive Building」会議室.

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成(K2417)「国際都市マニラと日本—近世から現代まで—」を受けたものです.